

「プロ野球の選手をNPBからの出向という形にすると野球界はどう変動するか？」

## 1 きっかけ

プロ野球では、ドラフト会議によって選手が入る球団が決められる。くじ引きなどによって就職先が変わる、大変珍しい業種である。球団の状況によって活躍できるかどうかが変わるのは、本人の実力も関わってくる部分なので仕方がない面もある。しかし、MLB（メジャーリーグベースボール）のチームに移籍したいと考えた際に、それを許可するかどうかも球団によって異なるという。この点に不合理さを感じた。プロ野球に詳しい人の中には、球団に就職したのではなく、プロ野球に就職したと考えるべき、と述べる人もいる。そうであるならば、本当に「プロ野球に就職する」という形を作るべきなのではないか、ということを検討した。

## 2 現行の問題点

- ① FA（フリーエージェント）制度により、ある程度の活躍が見込める選手の年俵が高騰する。球団の支出の総額には限度がある。FAの権利まで先の選手への年俵や、設備の拡充を圧迫している面は否定できない。
- ② MLBなどへの移籍に対する態度がNPB全体で統一されておらず、各球団の判断に委ねる形となっているため、不平等感を生んでいる。
- ③ 経済的に豊かな球団が、その経済力を優勝に向けるのは結構なことだが、「金で選手を取る」という方向性の努力をする傾向にある。野球界全体のことを考えたら、その労力を育成や設備拡充などに使い、野球技能の向上に使うべきである。

## 3 出向制度のルール

- ① プロ志望の選手はNPBと契約し、各球団に出向する。各球団はドラフト形式で出向される選手の希望を出す。
- ② 各選手の年俵は、NPBが「NPBへの貢献度」で決定する。
- ③ 各球団は、NPBへ選手の出向料を定額支払う。
- ④ シーズンが終了時、NPBはそれぞれの選手の次のシーズンの出向先を決める。このとき、規定打席や規定投球回の2分の1以上の選手は、球

団が希望すれば「プロテクト選手」となり、来期も同じ球団に出向される。各球団は、上記の条件の選手の他に、10名を指名して「プロテクト選手」とすることができる。プロテクト選手以外の選手は、新人とともにドラフト会議にかけられる。ドラフト会議で指名がかからなかった選手のうち、NPBが判断した選手については引退とする。

- ⑤ MLBなどへの移籍はNPBの退社とする。

## 4 出向制度のメリット

- ① NPBへの就職ということで、研修などが一律に行えるため、日本プロ野球界が目指すべき姿が統一される。
- ② 球団は主力選手をプロテクトし続けることができるため、ファンが「球団の顔」とも呼べる選手を応援しやすくなる。また、球団も育成に力を入れやすくなる。
- ③ 出場機会に恵まれない中堅、若手選手の球団間の流動性が高まり、より公平に機会が与えられやすくなる。

## 5 出向制度のデメリット

- ① 個人事業主としての契約ではなく、NPBに就職という形になるため、成績不振による減俵や引退勧告による解雇が法的に難しくなる。
- ② ①により、NPBの経営が圧迫される可能性がある。

## 6 考察

選手の減俵や解雇の困難性により、現実的な制度化は難しい。ただし、減俵については出向先の変更により、ある程度は解決がされうる。また、引退についても、解雇ではなく、プロ野球選手以外の人材としての出向や転職を勧められれば、実現の可能性はゼロではない。「プロ野球界」に就職した以上、これらは「プロ野球界」に必要なコストであるはずである。本稿は、選手の引退後の人生設計も含めた、プロ野球界全体の構造改革の検討になったと考える。